

白木峰高原

# こどもの城

どわ～の  
『どきどき わくわく のびのび』





## 進化する施設

---

こどもの城は、諫早市独自の施策です。子どもたちが生きる力を培うことを目的にして、平成21年3月20日に開館しました。開館して5年が経過しましたが、毎年、10万人単位での記念セレモニーを実施しております。多くの市民に愛され、利用されていることを心から嬉しく思いますし、利用者が減少しないという一面をとりあげても、一定の成果をあげることができたのではないかと感じています。

そんなこどもの城は、これからも進化を続けてまいります。

教育の視点、子育て支援の視点、地域づくりの視点、行政が抱える様々な課題を「心」の面からつなぎ、既存の施設のよいところを複合的に取り入れています。これまで、このような事業の事例は少ないためか、市内外からも注目度が高くなってきており、近隣自治体をはじめ、国内各地で知名度が高まっています。今後の子育て支援等のあり方について、先進事例になる可能性を含んでいると感じています。

こどもの城は、開館前から「市民とともにつくる」ということを考えていました。ここまで、ある程度の成果をあげることができたのは、何よりもよき理解者として、あるいはボランティアとして活躍される市民参加力があつたからであると感謝しています。今年度の報告書では、そんな市民の皆様が語ってこられた言葉の中からいくつかをとりあげ、その意味や背景について考えてみました。

今後も、人々の抱える悩みや問題に市民とともに正面から向き合い、実践を積み重ねる中で、市民の思いを感じながら、必要な取組について研究しチャレンジしてまいります。

平成26年3月

諫早市長 宮本 明雄

## “ナマ”の言葉

こどもの城が開館して5年経ちました。多くの利用者、団体を受け入れ、市民とともに試行錯誤しながら歩んできた5年間でした。

こどもの城のプログラムでは、体験を学びに繋げるために、「ふりかえり」という時間を設定します。そろそろ、こどもの城自体も「ふりかえり」の時期だと思い、本報告書では、5年間におきた歩みを拾いあげてみました。

併せて、5年間の間に飛び出してきた“ナマ”の言葉を拾ってみました。“ナマ”つまり生きた言葉です。生きる力を目指すこどもの城としては、こういった生きた言葉に今後も注目していきたいと考えています。

第1章は、利用者との会話でよくあるものをあげてみました。ふらっと来る方、ねらって来る方、それぞれ違う感じがしますが、現代社会におけるこどもの城の意義について、あらためて紹介したいものを選んでみました。

- ☆遊ぶところは、ここですか？～全部です
- ☆すいません～何か、悪いことしたの？
- ☆相談が・・・～初めて、涙をみせてくれたね

第2章は、利用者のお母さんの言葉をあげてみました。とりわけ、お母さんの気持ちに寄り添いながら、家庭中心の生活になりがちなお母さん自身が、地域・社会に目を向けてほしいと思い、選んでみました。

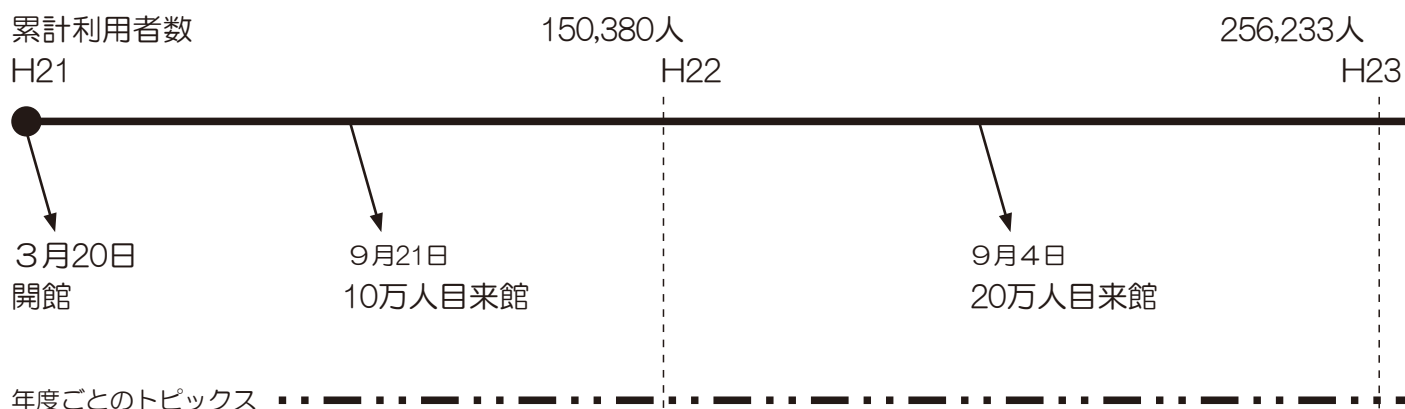
- ☆大人の城～子どもの生きる力に大人が与える影響
- ☆嫌いなこともしなさい～嫌いなままでいいこと
- ☆諫早は、いいなあ～近隣自治体の動き
- ☆東京は、塾に行く小学生に声をかけられる～地域再考

第3章は、ボランティアや研修に招いた講師の言葉をあげてみました。運営を補助しながら、自分たちも学んでおられる方々が、子どもたちをはじめ利用者と接する中で、深い愛を伴って思わず発した言葉を選んでみました。

- ☆泣くなら帰れ～あらためて「生きる力」を考える
- ☆イベント施設じゃないやろ！～利用者数で評価せず
- ☆Play for peace～未来を生きていくために

いずれも、こどもの城の目指すことが、より深く伝わってほしいと思い、また皆さんの考える題材になればと思い、選んでみました。言葉の背景まで受け入れながら読んでみてください。

# こどもの城開館～5年間の軌跡



準備期→実践的ニーズ調査期（プログラム開発・各種連携構築拡大） →

## 1年目

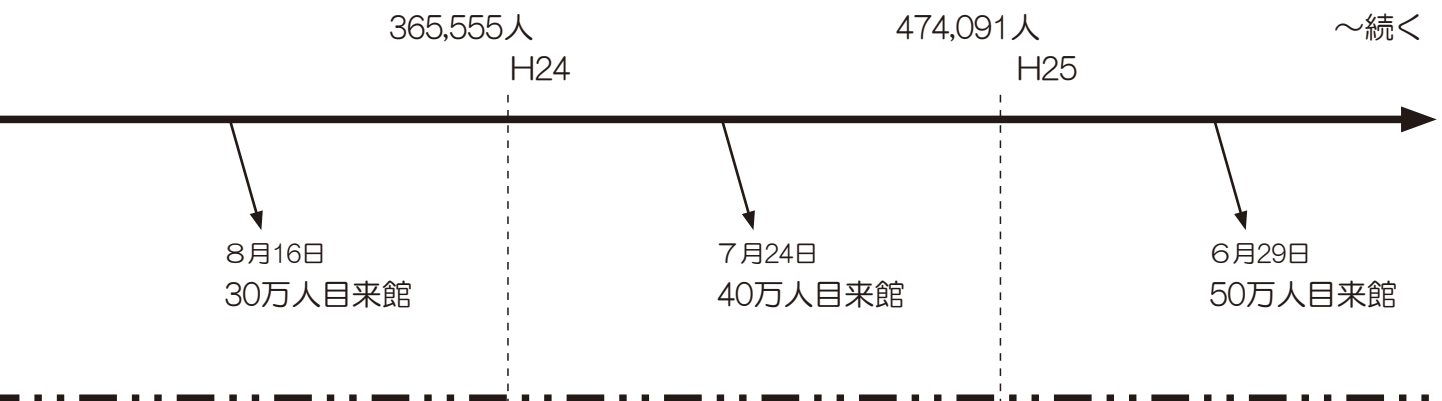
- ★諫早市独自の心の施策としてスタート  
諫早ジュニア合唱団の歌声が響く
- ★周辺の自然を活用した体験プログラム  
「白木峰忍者塾」、「森のようちえん」が好評
- ★市内原口町在住の吉田君兄弟が自転車で来館に2度  
チャレンジ
- ★11月、高来町健全育成会がこどもの城と共催で自然  
の家に宿泊した中学校入学前の児童のプログラムを実  
施し、成果をあげる
- ★12月、子育てサークルとして初めてスタッフ付のプ  
ログラムを実施

～以降、同様の利用が増加

## 2年目

- ★心の教育設備「プロジェクト・アドベンチャー」がオー  
プンし、団体のプログラムの他、土日の催しとして実  
施が始まる
- ★1周年を記念し、「どわ～の（ドキドキ ワクワク、  
ノビノビの頭文字）」が愛称として選ばれる
- ★上山小学校、みはる台小学校、北諫早中学校の児童生  
徒が、ボランティアとして活躍し始める
- ★ティピ（アメリカ先住民族のテント）の寄付をいただ  
き、冬季の活動として、中での焚き火やグループ・カ  
ウンセリングの場として活用され始める
- ★館長講話型の「子育てワンポイント・コーナー」が始  
まる





ニーズ対応期（人材養成・研鑽、団体支援充実、各種相談・依頼対応、現代的課題対応等）

3年目

- ★「森のようちえん」のニーズが徐々に高まり、雨天でも戸外に出る形として実施
- ～参加者が事前に準備してくる形態の催しを試行してみて、活動の効果の高まりを感じる
- ★子育て中の母親、学校等の機関から、子育てや教育に関する悩み相談が増えてくる
- ★年間約11万人の来館者（100を超える団体）に職員を増やして対応～「船長方式」を導入し、スタッフ個々の研鑽システムを試行
- ★ボランティアの佐々木三紀子さんが神戸市総合児童センターで開催されたボランティア交流会でこどもの城の取組を紹介

4年目

- ★スタッフとボランティアが作曲したオリジナル曲「たからもの」、「おかえり」2曲を日曜日に実施している「こどもの城バンド」で披露
- ～利用者がYou Tubeにアップ
- ★7月2日、ボランティア・運営協議会長の中村則子さんが死去
- ★利用者のお父さんたちと「森の広場」にピザ窯を作成
- ～子育てサークルの活動などで活用
- ★「森のようちえん」を①年間継続申込み編、②木曜日の先着申込み編、③不定期な入門編の3つに整理
- ★実績報告で独自の運営手法を紹介
  - ・ホウレンソウよりシュンギク
  - ・ヒット企画はHuman in trouble
- ★緊急雇用事業で「ぐんぐんカルテ」を実施

5年目

- ★宝くじのコミュニティ助成で新たなふれあい遊具を増設
- ★父親の子育て参加を目指し、水曜日に「オヤジの生活カアップ」を試行
- ★高校生ボランティアとして活躍していた森内さんが嘱託員として採用される
- ★各種専門的な内容の依頼が増加
  - ・大学の講義
  - ・病院、学校等の職員研修
- ★こどもの城で知り合った母親のグループ等が、子ども夢基金の助成を受け事業を実施
- ～同グループは独自に呼びかけ、自然の家で幼児と親のキャンプも実施



## 第一章 “よくある会話”

### 遊ぶところはここですか？

#### ～ いいえ、全部です

こどもの城は、開館以来、テレビ・ラジオ・新聞などマスコミに何度もとりあげられました。とりわけ、映像を主な手段とするテレビ番組では、こどもの城の様子が画面に再現されます。そこには、館内で遊ぶ子どもや大人たちの姿が映されています。類似施設には設置していない大型遊具などが映像によって紹介されます。映像だけをご覧になられた方は、きっと次のように思われることでしょう。

「いろんな遊具があって、無料で、子どもが屋内でも遊べる場所なのね」

もちろん、それは、こどもの城の一面であることは否めません。しかしながら、こどもの城は諫早市が実施する心の施策です。子どもたちが生きる力を培うために、大人も共に学びあうことを目的としています。そのために、遊びという手段を使っているわけです。残念ながら、時間や撮影機器に制限のあるテレビの映像だけでは、そういった施設の目的という抽象概念までは、なかなか伝わりにくいものです。放送していただく番組のコンセプトとの兼ね合いもあります。イベントなどの情報提供をコンセプトにしている番組では、利用者の楽しそうな笑顔を映し出してくれますが、毎日のように訪れる子育ての悩み相談に来られている親の姿などは取り上げられません。そこで、利用者とスタッフの間でよくある会話が展開されます。



利用者：「遊ぶところは、ここですか？」

スタッフ：「えっ？（窓から屋外にも目を移しながら）全部、遊ぶところですけど……」

では、こういった類の会話にある「遊ぶところ」について少し分析してみましょう。

会話の前後の様子などは省略してありますが、概ね、こういったケースでは、利用者とスタッフに下表のような考え方の違いがあると感じます。

	利用者	スタッフ
何で遊ぶ？	設置されている遊具で遊ぶ	遊びは創り出す
誰と遊ぶ？	一人で遊ぶ、家族で遊ぶ	よその人と遊ぶ
どこで遊ぶ？	紹介されていた場所で遊ぶ	子どもが行くところ全てが遊び場になる
どこまで遊ぶ？	今日、遊ぶ	とことん遊び込む

どちらが正解かということは考えませんが、こどもの城の設置目的を考えると、こどもの城においては、スタッフの考え方で運営し、それを啓発していくこととなります。

参考までに、このことに関して、大田堯さん（元東京大学教授、都留文化大学学長、日本教育学会会長）は、持続可能な社会づくりを目指す「地域に根ざした環境教育」モデル構築事業調査報告書（平成25年3月、特定非営利活動法人ECOPLUS）の中で、次のようなことを述べています。

遊びというものは非常に本質的なものです。

人間が人間になるために必要な本質的な要素はどこにあるのかというと、内発性ということにあるわけです。人は人の命令によって遊ぶことはなく、自ら内発するということです。

これが遊びの本質であり、遊びの格好はしていても、やらせの遊びをやっているのでは意味がありません。本当に子どもが内発的に色々な企みをする。そして実験をする。そういう環境作りを大人が条件を整えてあげる、広い意味での演出活動は大人に義務があり、責任があります。

教育というのは、そういうふう(中略)、響き合えるような感情レベルから、共に喜ぶ、共に悲しむ、共に正しいと考えるという中で成り立つと考えます。



こどもの城は、確かに既設の遊具を設置しています。しかし、それはあくまでも、大田さんが述べておられるように、その先にある本質的な遊びへの導入であると考えています。特に、こどもの城では、屋外の自然の中での遊びを奨励しています。自然という環境は、天気などでわかるように、自分の思いのままにならないことが多い環境です。それでも、人間は環境に適応したり、自分の周囲を変えようとしたりします。思い通りにならなくても、楽しさを求めることはできます。大田さんが言われるような内発性を引き出すには、もってこいの条件ということになります。こどもの城が白木峰に建設された意味は、こういった理由からなのです。



これまででも、ずいぶんと様々な形で、こどもの城の目指すことを理解してもらおうと、啓発してきたつもりです。遊びがカタチを変えてきた中で失われているかもしれない人間の本質的なものを、今後追いかけて行きたいと思います。

とりわけ、内発性については、自ら考え、行動するという概念を含む生きる力の重要な要素だと思いますので、今後もスタッフは答え続けていくことでしょう。

「全部、遊ぶところですよ」と。

## すいません

### ～ えっ？ 何か、悪いことしたの？

こどもの城では、スタッフが赤ちゃんを抱いている姿をよく見かけます。このことは、お母さんの気持ちをおだやかにする効果もあるようです。こどもの城では、これを「お母さんが一人の女性に戻る時間」と呼んでいます。





こどもの城のことをあまりご存知ない方も、スタッフが無邪気に「上の子と遊んできてください」などと言って手を出すので、少し驚きながらも、赤ちゃんを差し出しながら、思わず一言を発するのです。そこで、よくある会話です。

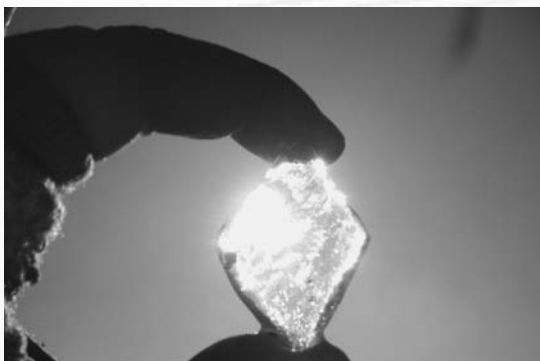
利用者：「すみません（すみません）」

スタッフ：「えっ？ 何か悪いことをしたのですか？」

もちろん、スタッフは、利用者が発する言葉の意味を理解しています。でも、なぜか、人々は「ありがとう」と言わず、「すみません（すみません）」と言うことが多いのです。

赤ちゃんを抱いてもらった時に「すみません」を言うのが礼儀であるならば、何だか、子育てが周囲の人々の負担になっている行為であるかのようなイメージを連想しませんか。なので、一応、スタッフが“突っ込みを入れる”のです。

「あなたは、子育てという素晴らしい行為をされているのではないですか」という気持ちを込めて。



なお、「すみません」は別の場面でも、使われることが多いようです。

例えば、自分の子どもが、他の子の遊具を取り上げようとしたり、不可抗力で他の子とぶつかったりする場合などです。

こういった場合には、「ごめんなさい」という意味を含めて心からお詫びの言葉を発するのは当然でしょう。しかしながら、過剰に「すみません」を連発される方も見かけます。あたかも、人とのトラブルを避けようとして、気を張り詰め、防御の姿勢をとっているかのようです。ぶつかることを避けて育てられた子どもたちは、どこで他人の体や心の痛みを理解していくのだろうかという疑問がわいてきます。



忘れてならないのは、巻き込んでしまった他の子に「ごめんなさい」を心から言うことです。子どもも一人の人間として尊重されるべき存在です。親には親権がありますが、親のものではありません。「相手の子の親から何か言われるのではないか」と心配して、相手の親の反応をうかがうなどということは次の段階でいいと思います。

そして、社会全体も、子育て中の親に対して（親どうしも）、今よりも少しだけ、子どものトラブルに寛容であっていいのではないかと思います。そうすれば、「すみません」よりも「ありがとう」が飛び交うようになる気がします。「すみません」を連発しなければならぬ社会は、なんだか窮屈で、見えない圧力が常にかかっている状態のような気がします。かたや、「ありがとう」が飛び交うということは、人々がやさしくかわり合っている状態だと思います。

## 相談が……

### ～ 初めて涙をみせてくれたね

こどもの城は、以下のような既存の施設を複合したイメージになります。

- ☆ 自然の家、青年の家など青少年教育施設…  
様々な体験活動ができる
- ☆ 児童館……予約なく利用することができる
- ☆ 子育て支援センター……子育ての情報提供  
や学習ができる



開館して5年が経ちましたが、実際に運営してみると、上記のことに加えて、子育てや教育に関して、親などからの相談が多くありました。つまり、**相談ができる**ところというイメージが加わってきたのです。

こどもの城における相談の特徴は、何と言っても、親が相談している間に、子どもが他のスタッフと遊ぶことができる（言い換えれば、意図的に子どもと離れることができる）ということがあげられます。もっとも、このことは、利用者の多い土日ではなく、平日や夜間が主になります。

個別の相談の内容は、ここでは紹介できませんが、以下のようなことが多いようです。

- (1) 乳幼児期の子育て方法、特に、叱り方
- (2) 叱ったあとの親の自己嫌悪
- (3) 子どもがいじめに出会ったときの対処
- (4) 不登校状態
- (5) 第一次・第二次反抗期
- (6) 家族間の人間関係
- (7) 子育てに関する夫婦や祖父母との方針の違い
- (8) 食事時のしつけ

実は、このような相談をされる方の中に、いつもは笑顔が絶えなかったり、自信に満ちあふれた子育てをしているかのようにふるまっていたりする方を見かけます。この方は、相談などして来られないだろうという方です。

そこで、よくある会話です。



「あのう、相談が……(言葉につまる、感情が吹き出す) ……ごめんなさい。泣いてしまって……」

「(一呼吸置いてから)……いやいや、それよりも、初めて私たちの前で泣いてくれましたね。ありがとうございます。」

人は、時として、自分にとって都合の悪いことや不幸が重なることがあります。もがいても、うまく行かない状態が続くことがあります。もしかしたら、そんな時こそ、一人で生きているのではないということを感じるチャンスなのかもしれません。頼ってもいい人がいることをあらためて感じることは、一見、身勝手な考え方のようにも感じますが、親として成長する機会の一つではないかと思うのです。「子ども一人育てるには、村じゅうの人が必要」というアフリカの諺もあるようです。



さて、上記のような会話のあとは、どのような展開になるかということ、まずは、溢れ出した感情を落ち着けて、実際に起きたことを語ってもらい、聴き手は聴くことに努めます。時々、話を整理したり、言葉を置き換えたりして、話の中身を時系列で整理したり、主語を明確にしたりします。このことは、語られる方が落ち着くことだけでなく、「しっかりと聴いてもらっている」と感じる効果もあるようです。

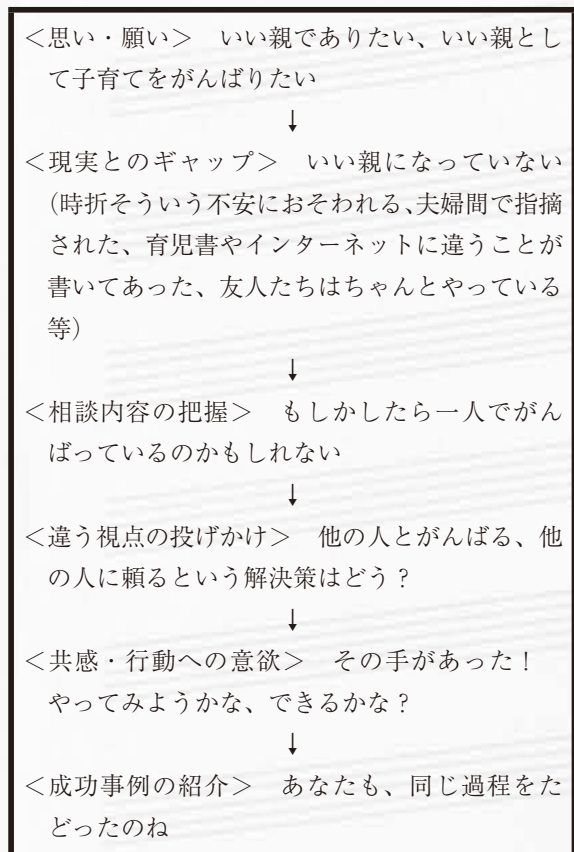
相談の内容に関して、解決策を求められる場合も多いです。答を探し出し、行動に移すのは、あくまでも相談に来られた方です。聴き手は、そのお手伝いの一つとして、一つの答だけを探すのではなく、いろんな視点を投げかけてみます。時として、突拍子もないことを投げかけてみることもあります。最も極端な例は、相談に来られた方が問題だと感じていることを疑ってみることです。

例えば、「私はダメな親だったとわかりました。ど

うしたら、いい親になれるのでしょうか」などと相談に来られた場合に、「いい親にならなくても、いいんじゃないのかなあ」、「私なんか全然いい親じゃなかったけど、周りにいい人がたくさんいたので、それなりにウチの子どもたちは育ったけどなあ」などです。

もしも、そこで違う視点に気づき、ご自身で答を出したなら、あとは行動の意欲を喚起するお手伝いです。成功事例の紹介や励ましの一語を添えるだけです。「あそこのお母さんに聴いてみたらどう？ 今はとても元気なあの人、毎日泣いていたことがあったから、話をしてくれるかも」、「私たちにできることがあったら、また言ってみてね」などです。

このことを流れの図にしてみると、下記のようになります。



こどもの城が開館5年目を迎えて、今までにない利用形態が見られるようになりました。子連れでなく、親だけで来館するという形態です。悩んでいた時期を通り過ぎ、我が子が幼稚園や保育園に通っていて、親自身がリラックスを求めて利用されている

のです。そういった方々は、スタッフの前で思わず涙を流すなど、素の姿、ありのままの自分、裸の私を現して、他人と共感する体験をされた方々です。自然に、スタッフとの心理的な距離が近くなり、物理的な距離も近づきます。中には、スタッフに頼んでマッサージや足ふみをしてもらっている方もおられます。「ここは、大人の城！」などと冗談を言っていますが、半ば真剣な顔つきで言われていることも多いようです。

そういった方々を見て、スタッフと距離を置いて利用している方々は、「あのグループは、いつもスタッフの近くにいる、しゃべっているよね」と思われているかもしれません。実は、グループでもなんでもないので。否、グループという他者との垣根はありません。メールで連絡をとり合うなどしなくても、「ここに来れば、誰か知っている人がいるかも」という程度のつながりです。それでも、よその子を抱き合うなど、自然な形でふれあっている方々です。



そして、その方々が、時にカウンセラー役となり、スタッフ以上の役割をされているのです。誰か悩みを相談に来られた方がいて、スタッフから「ねえ、あなたのことを語ってくれませんか」と頼まれた場合などに、「私も毎日、泣いていたのよ」などと自分をさらけ出しているのです。

このことは、悩みの渦中にある方にとって、一気に心理的な距離を縮めます。仲間意識もわいてきます。「友達だよ」などと確認をしなくても、友達以上のことをやってくれる期待感がわきます。何よりも、行動への意欲が喚起されてきます。実は、悩んでおられる方々の中には、育児書や医学書のほかインターネットなどで情報を得ていても、それらの貴重な情報を断片的に意識することによって、行動で





きなくなっている方も多いようです。「私も毎日、泣いていたのよ」と語っていただける方々からの生きた情報は、文字や写真や音声だけではなく、語り手の熱や双方向の反応から、その成功体験が事実であることが伝わってきます。

夫婦やお友達と利用された方々は、いっしょにいる人々の間で過ごしたいと願って来館されていることでしょう。でも、こどもの城は、他者と交流しながら大人も共に学び合う施設なので、垣根を越えて交流してみしてほしいと願っています。

人前で泣くなど感情をさらけ出すことは、時として、恥ずかしいことだと感じることもあります。ただ、こどもの城を頻繁に利用されている方の中には、「私、今、弱いのです」と言ってみた時から、子どもの病気や障害が治った、夫婦で自然に会話できる時間が戻ってきた、人を信じて頼ることができるようになったなど、事態が好転していった方々も多いのです。

今後、どこまで、このようなお手伝いができるかどうかわかりませんが、こどもの城は市民の皆様とともに、チャレンジしたいと思っています。



## 第二章 “お母さんの名言”

### 大人の城

#### ～子どもの生きる力に大人が与える影響

「こどもの城」という名前の施設は、国内にいくつかあります。しかし、「大人の城」という名前の施設は知りません。第1章で記したように、諫早市こどもの城では、たくさんのお母さんたちが、「ここは、大人の城」という名言(?)を言われます。

諫早市こどもの城の設置目的には、「家族その他子どもたちを見守る人々との交流を通して、子どもたちの生きる力を培うため」ということが明記してあ



ります。

そうです。諫早市こどもの城（以下、「こどもの城」）は、大人も学ぶところなのです。

あくまでも、こどもの城では、子どもたちを主語として（子どもたちに主体を置いて）、その生きる力を培うために運営しています。ここで考慮すべきは、大人が子どもたちに与える影響です。昔から言われていることですが、過保護・過干渉など、生きる力（自立）とは反対の概念として考えられる大人の接し方です。こどもの城を運営してみて感じるのは、最近では、過保護・過干渉に加えて、過指示・過禁止・過情報・正解を一つに絞りこむことなどもあるようです。



一つ事例を挙げてみます。

学校の授業で、こどもの城に来館した小学生のプログラムを実施している時のことです。進行役のスタッフが、プログラム（授業）のねらいや注意事項などを小学生と確認しようとして話を始めました。子どもたちは、とても素直で、スタッフの話に反応しています。

ここまてを読んで、皆さんは小学生のどんな姿を想像しますか？

きちんと「体操座り」をして、うなずいている姿でしょうか？

実は、この時の小学生は2年生、約100名でした。スタッフの話ひとつひとつに、隣に座っている同級生と笑顔で会話を始めるのです。静かにうなずいているわけではありません。スタッフが次の話を始めると、またスタッフの方を向いて聴くのです。つまり、よく反応していたのです。



でも、横で見ていた先生は、感心していません。小学生たちが静かに（黙って）聴いていないからです。そこで、先生は何人かの子どもが座っているところまで動き、小学生の肩をさわり、「静かに聴きなさい」といった類の注意をされました。

この認識の差は、**秩序を前提とした学校での教育と、無秩序な状態から秩序を生み出す遊び場の違い**が生むものだと思います。

そこで、別のスタッフが、少し大きな声で小学生に声をかけてみました。

「君たちは話の聴き方がじょうずだね。ひとつひとつ声を出して隣の人と確かめ合うし、次の話しが始まったら、またちゃんと聴くことができるね。」

子どもたちは見事にこの言葉に反応し、次の話しが始まったら、またちゃんと聴くのです。

このできごとを通して、素晴らしいなと感心させられたのは、その後の先生の反応です。「きょうは、私自身がとても勉強になりました」と言っていたのです。「聴きなさい」と指示もせず、「喋ってはいけません」と禁止もせず、むしろ褒めて、子どもたちが望ましい聴き方ができるように誘ったのですから。



よく考えてみると、もしかしたら、子どもたちの態度を注意しようとして、そちらに心をとられていた先生自身が話を聴いていなかったのかもしれませんが、**いろんな視点から見ると、いろんな正解があるのだ**と感じ入られたようです。さすがに学校の先生です。スタッフも、そんな学びをしていただいた先生のことを好きになり、この先生にとっても、「大人の城」となった事例でした。





## 嫌いなこともしなさいっ！

### ～ 嫌いなままでいいこと

子どもたちが成長するうえでは、人見知りの時期があるものです。ある日、スタッフが、1才児を抱いたら、「お母さんのところに帰りたい」と言っているかのように泣き出しました。実は、この時、お母さんは「少しの間、離れておくれ！」という思いを抱いていたのです。

スタッフは、そんなお母さんの気持ちを察していたのですが、わざと、泣いている子をお母さんに返してみました。すると、お母さんは、泣いている子を再びスタッフに返して来ました。「イヤなこともしなさいっ！」という我が子への一言を添えて。

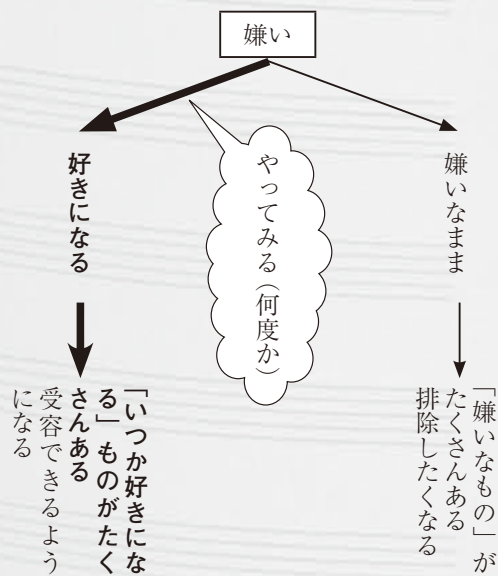
昔から、「好きこそ、ものの上手なれ」などと言われます。好きなこと、興味のあることはたくさんやってみて、力を伸ばすことができるようです。だから、「好きなことは、たくさんさせてあげましょう」などと言われます。泣いている子を返されたスタッフは、このことを思い出しました。「好きなことをやらせましょうよ」と。

スタッフの頭の中には、「好きなことをやる＝嫌いなことはしない」という図式が浮かんでいたのです。



しかし、よく考えてみると、「好きなことをやる＝嫌いなことはしない」の考え方には、一つ抜け落ちている視点があります。

それは、「嫌いなことも好きになるかもしれない、好きなことが増えるかもしれない」という視点です。この時のお母さんは、そこまで考え及んでいなかったかもしれませんが、日々の子育ての中で、我が子を愛し、「我が子が好きなことをやってほしい」という願いを持たれていました。図にすると下のようになるでしょうか。



こどもの城としては、太字の矢印をたどってほしいのです。生きる力が培われ、自尊感情・自己肯定感が育ち、生き生きとチャレンジでき、創造力が身につくのではないかと思います。これは、人と人の関係にも応用できそうです。ちょっと嫌だけどやってみて、自分自身が気づいていないかもしれない新しい自分に出会うという過程が必要ですけど。

子どもたちが生きる未来は、子どもたち自身にとって、「この世は、『いつか好きになる』ものだらけ」であってほしいと願っています。

## 諫早は、いいなあ～

### ～ 近隣自治体の動き

こどもの城には、諫早市外から多くの利用者也来られます。現在、諫早市外に居住されている方でも、こどもの城は無料で利用できます。祖父母が諫早に居住しておられる方、諫早に友人がおられる方、諫早にある学校を卒業された方、諫早に住みたいと思っておられる方……何より、どこに住んでいても、子どもたちは、子どもたちですから。実際に、市外の方の中には、諫早市民のお手本となりそうな素晴らしい家族がたくさんおられますので、考え様によっては、無料の講師を招き入れているようなものです。

もっとも、こどもの城の趣旨を理解されていない方もたくさんおられますが……。



そんな方の中には、「諫早は、いいなあ～子育て施設や図書館などの文化施設が充実していて」と感想を語られる方がいます。さらには、ご自身が居住する行政機関などに諫早市同様の施策について、働きかける方もおられるようです。そんなことも影響してか、ここ数年、近隣自治体にも類似児童施設設置の動きがあるようです。実際に、長崎市、大村市、佐賀県鹿島市などから、児童福祉部門の方が視察に来られました。夏には、長崎県知事も県民とふれあう事業「青空知事室」の一環として、視察に来られました。他にも、広島県廿日市市の市民の方々が、既存の施設を活用して、こどもの城のような施設にできないかと考え視察に来られました。

こどもの城は、他にあまり類を見ない諫早市独自の施策ですので、いわば先進的な事例として、だんだんと注目されているようです。もしも、他施策の



見本となるようになれば、それは喜ばしいことですが、こどもの城としては、子育てや教育を取り巻く現代的な課題も意識して運営していますので、表面的な模倣でないところとは、今後も連携して、お互いが成長し合う関係になればいいと考えています。

参考までに、鳥取県智頭町では、「まるたんぼう」というグループが、「森のようちえん」を実施しており（こどもの城でもやっています）、テレビでも特集されたこともあって、そのような子育てをしたいと願う10家族が移住されてきたそうです。そこまでの波及効果を生むかどうかわかりませんが、諫早市民の皆さんに還元できるように、これからもチャレンジしていきたいと思います。

## 東京は、塾に行く小学生に声をかけられる

### ～ 地域再考

お盆や正月は、諫早に縁のある方々が、里帰りをされる時期です。諫早に住む祖父母にとっては、久しぶりに見る孫や娘・息子と対面するうれしい時です。

そんな中、東京から諫早に帰省された、あるお母さんの何気ないお話しです。「うちの娘は年長さんだけど、近所の小学生が塾に行く時など、声をかけて挨拶し合うけど、里帰りしても、子どもたちを見かけないし、声をかけないなあ。」



このお話し……少し意外でした。

実は、スタッフも他の利用者も、「東京＝殺伐としたところ」と思い込んでいたからです。中には、「あんなところには住めない」などと言っている方もおられました。

確かに、東京のビジネス街などでは、早足で歩く人々に目眩がしそうなこともあります。でも、確かに、東京にも人が住んでいるのです。子どもたちが生きているのです。健やかに成長してほしいと願う親たちがいるのです。そのことは諫早と変わらないのです。国立青少年教育振興機構が実施した「子どもの体験活動に関する調査研究」（平成22年）では、幼少期の体験活動の重要性が指摘されていますが、子どもたちの体験活動は少ないというデータが



あるようです。そして、**体験活動の少なさに地域差はない**そうです。

実際に、スタッフの家族に、東京の小学校に通っていた子がいるので、たずねてみたら、「ああ、東京の人は、やさしかったよ。」と懐かしそうに答えてくれました。彼らにとっては、「東京＝やさしいところ」でした。そして、自然体験活動などについてたずねてみると、東京というと都会に住んでいても（否、都会だからこそ意識して）、いろんな自然体験活動をやってきたようです。上述のデータの通り地域差は感じられませんでした。

諫早は、東京と違い、例えば塾に行くときに、自家用車で送るケースも多いと感じます。そのため、帰省されたお母さんが、たまたま、子どもたちと接する機会がなかったのだと思います。東京と諫早と、



どちらがいいかなどと論じるつもりはありませんが、遠くの地で母親になった方が故郷・諫早に寄せる思いは、子どもたちに声をかけるなどやさしさを持っていた地域なのかもしれません。遠くに住んでいるからこそ、諫早のことを愛し続け、諫早を客観的に見つめ、諫早がいつまでもやさしい場所であってほしいと願っておられるように感じました。

平成26年には、諫早で国体が開催されます。PTAの全国大会も開催されます。九州地区の母子寡婦大会も開催されると聞いています。様々な人々との交流が展開されていくことでしょう。帰省されたお母さんの願いに応えなくとも、諫早という地域がいつまでもやさしい地域であるように、住んでいる私たちが再考してみるきっかけとして、この話題を取り上げてみました。



## 第三章 “ボランティアや講師の迷言？”

この章では、こどもの城の運営に大きな力を与えていただいているボランティアや外部の講師の会話を取り上げてみます。

### 泣くなら帰れ

#### ～ あらためて生きる力を考える

こどもの城では、毎日、何らかの催しを行っています。「きょうは、どんな“イベント”がありますか？」などと電話での問い合わせも、よくあります。“イベント”というと、何だか大掛かりなものを想像してしまう人もいると思うので、外部の方に説明するときには“催し”と表現し、館内で、参加者を募るときには、「何があるのだろう」という期待感をもし出すために“プレイショップ”と呼んでいます。



催しを行う意味は、体験活動への導入・勧誘です。「森までお散歩」、「藪歩き」、「焚き火」、「ものづくり（木工）」、「アドベンチャーワールド（秘密基地づくり、沢歩き）」などの自然体験、「英語であそぼう」、「こどもの城バッティングセンター」、「こどもの城バンド」、「野蛮な遊び」などの交流体験……様々なものに定員内で自由参加でき、ボランティアやスタッフが場を進行し、集まった子どもたちの年齢や発達度合いによって内容を変えていきます。時折、大人向けに活動の意味の説明も入れていきます。

しかしながら、「こういった体験活動だけをやって、はたして『生きる力』が身につくのか？」スタッフは常に、そう考えています。様々な体験をすることは重要なことだと思いますが、**一過性で終わって**



しまつては、“体験しただけ”だと考えています。

「生きる力」という概念は抽象的ですが、そこには自発性、継続性という意味が含まれています。「生きる力」を培うためには、**何度もくり返してやる、自分で工夫してみるなど試行錯誤の過程が必要**ではないかと考えます。そして、何よりも、それが子どもたち自身の内なるものによってなされることが重要だと考えます。

かつては、子どもたちが集まる遊び場が、どこにもありました。そこでは、年上の子どもたちが、ある種の指導者の役割を担うことがありました。年下の子がいっしょに遊んでいてダダをこねたりすると、「お前とは遊ばん。家に帰れ！」などと親から受







けているかのような叱責が飛んできたりしたものです。「お前が遊びたいんだろう？ だったら泣かずにみんなと楽しく遊べ。それが、ここのルールだ」という意味が含まれていたと思います。

こどもの城の催しは、そういった遊び場を再現しようとしたものです。中には、子ども自身があまり気乗りしていないのに、親が体験させたいという気持ちで参加している場合もあります。子ども自身の自発性がない場合です。そういった子と「思い切り楽しみたい」と思って参加している子が混在していることもよくあります。遊び場が消えたと言われる現代では、年上の子からの叱責がなくなったかもしれないので、泣いてから叱責するよりも、泣く前に、参加する子どもたちとある種の契約・意思確認をするのです。

「いいか、みんな。今から遊ぶぞ。『泣いたら帰れ』って言うからな。それでいい人は、いっしょに遊ぶぞ！」

## イベント施設じゃないやろ！ ～ 利用者数で評価せず

こどもの城は、開館以来、多くの利用者が訪れています。その陰に、ボランティアの力があることは見逃せません。まさに諫早の市民力を発揮していただいています。皆さん、立場や職業は様々で、学生、主婦、教師、民間企業社員、元刑務官、市職員、小児歯科医、福祉施設職員、病院事務員、個人商店経

営者、野外教育団体スタッフ……いろいろです。

職業とは別に、現役の子育て中の父親、母親もいます。ある日、スタッフの一人が急な体調不良に陥り、予定していたイベントを誰が実施しようかという話になりました。そのとき、一人のお父さんボランティアが、こんなことを言ったのです。

「こどもの城は、イベント施設じゃないやろ。人を集めようとして、イベントばかりをせんでよかたいね(しなくてもいいじゃないか)。イベントせんやったら(しなければ)人が来ん施設を目指すとね？」

この言葉に、目が覚めました。

確かに、たくさんの方が訪れてほしいという気持ちはありますが、それは、あくまでも利用者が考え、行動することです。子どもたちの自発性を目指すのですから、こどもの城が集めるのではなく、利用者が集まるのを目指すことが適しています。利用者数は評価の一面かもしれませんが、あくまでも、それは一面にすぎません。そう考えて運営してみたら、結果的に多くの方が訪れるようになったということです。



今でも、毎日、何らかのイベント(第2章でふれましたが、「イベント」と言われたり、「プレイショップ」と呼んだりするものです)を実施しています。それらは、利用者にとっては、体験活動への入口として、短時間で気軽に参加でき、食べ物に喩えると口当たりのいいもののように思われます。しかし、



あくまでも入口です。その先のたくさんある体験活動への導入にすぎません。多くの時間が必要であったり、子どもたちにチャレンジを促す場面を設定したり、時に、「良薬口に苦し」と感じられるような体験への導入にすぎません。

お父さんボランティアの一言は、生きる力を培うという大きな目的に向けて、本物の質を追求しましょうという提案でした。

## Play for peace

### ～ 未来を生きていくために

現代は、遊び場が消えたとか、遊び方が変わったとか言われます。遊び場が消えると、遊び方が変わると、何か不都合なことがあるのでしょうか？

たぶん、あるのです。



ある日の夜、大人の勉強会が、こどもの城で開催されました。「夜間なので、子どもだけを家に置けない、よその家に預かってもらうのは気がひける」ということで、子どもたちは別の部屋で宿題をするなど待機しておくことになりました。途中で子どもたちの部屋をのぞいてみると、宿題を早々に終えてゲーム機で遊んでいました。各自、それぞれ自分のゲーム機を持って……

もう一つゲーム機で遊んでいた例を紹介します。子どもがいるスタッフの家に、友だちが10人くらい遊びに来ました。やはり、ほとんどの子どもたちが自分のゲーム機を持っていました。ところが、こちらのグループは、みんなで一つのゲーム機をのぞき込んで遊び始めたそうです。



この2つの事例は、あくまでも一場面にすぎません。各自で遊んだ子どもたちも、一つのゲーム機で遊んだ子どもたちも、別の場面では逆の遊び方をしているかもしれません。そのことを前提としつつ述べますが、遊び場でいろんな人と遊んできた経験のある方なら、各自が自分のゲーム機で遊んでいる姿に違和感を覚える人も多いのではないのでしょうか？

実は、各自がそれぞれのゲーム機で遊んでいる姿を見たスタッフは、違和感を覚えたそうです。大きさかもしれませんが、恐怖に近いものを感じたそうです。

かたや、ゲーム機で遊ぶことについて、いろんなことが言われますが、一つのゲーム機で遊び始めた姿を見たスタッフは、何だか、ほのほのとした雰囲気、「ゲーム機も使い方によって、友だちと良い関係になるんだな」と感じたそうです。

こどもの城ボランティア等養成事業の一つ、「カウ



ンセリング研修」の講師を務めていただいた難波克己さん（玉川大学心の教育実践センター）は、こんなことを投げかけていました。

「私たち、大人は、どれだけ遊べますか？」

そして、このように続けられました。

「世界には、紛争地帯で子どもたちに遊びを仕掛けている人たちもいるそうです。遊びは言葉を超え、子どもたちの心を開いていきます。遊びはいろんな可能性を持っていると思います。そう、**Play For Peace!** です。」

遊びは、時として子どもどうしが対立を起こします。「自分のもの！」と言って物を取り合うこと、「手が当たった」などと言って殴り返すこと……そこで終われば、for peaceは学ぶことができません。対立を未然に防いでも学ぶことができません。**対立の先にある「仲直り」まで遊び込む**ことで、解決する力を学ぶことができるのではないのでしょうか。

そして、それらの力は、人と遊ぶことで学ぶことができるのです。

大人の都合で、「ちょっと遊ばせておく」などという場面もあると思いますが、そういう消費的な遊びだけでなく、創造的な遊びの時間を生活の中で捻出することが必要なのかもしれません。そして、「腹



いっぱい遊ぼうぜ！」と自分自身も手本になり、遊び込むことが必要なのかもしれません。

なぜ、子どもたちに遊びが必要なのか？ こどもの城のスタッフは、その場を提供しているがゆえに、時に自問自答します。そんなときは、“Play for peace”という答を出して、今後も子どもたちと遊ぶことにします。子どもたち自身が、自分たちの手で、未来を切り拓いていくことができるように願いつつ。



## 利用状況

総利用者数

571,719人

平成25年3月～平成26年2月利用者数 108,521人（2月末現在）

### ◆月別利用者数

	平成25年
3月	10,893人
4月	9,100人
5月	8,090人
6月	10,192人
7月	10,032人
8月	13,482人
9月	10,563人
10月	9,343人
11月	8,466人
12月	5,274人
1月	6,477人
2月	6,609人

### 1 利用者層の傾向

- ・平日は、母親と乳幼児（1人～2人）連れの利用者が多く、特に子育ての悩みを抱える母親の利用が増加し、複数のサークル化が見られた。
- ・一方で、夫婦で子どもを連れてくる家族には、他の家族と触れ合おうとしない利用者も多いため、スタッフが執拗に誘う場合もある。
- ・土曜日や日曜日（特に、午後）は、諫早市外の利用者が多い。見えないところで、ガムやタバコの吸殻が捨てられていることも多い。
- ・利用のきっかけで際立って多いのは、口コミである。
- ・各月のカウンセリング対応件数は、【表1】のとおり（平成23年度から、件数のみ記録）。

【表1】

2月	7件	9月	10件
4月	10件	10月	10件
5月	11件	11月	8件
6月	23件	12月	8件
7月	21件	1月	8件
8月	8件	2月	7件



## 2 複数回利用者（リピーター）の傾向

- ・複数回利用者（リピーター）は、9割超を占める。
- ・約30家族が、毎週利用される。
- ・複数回利用者（リピーター）には、職員とのふれあいを求めて来られるほか、子育ての情報を得たい、健康的に遊ぶ大人の男性を我が子に見せたいなどが一番の利用目的になっている。

## 3 時間帯別入館傾向

- ・時間帯別入館傾向は、下記【表2】のような状況にあり、特に冬季の土日においては、早い時間帯の来館が少ない傾向が見られた。
- ・早い時間帯の来館を奨励するため、土日祝日の開館直後に人気メニューの「10mの壁にチャレンジ」を20人限定で実施しているが、11月末までは開館前から利用者が並んでいる傾向が見られた。
- ・毎週木曜日に、「ぶち森のようちえん」と題し、2時間の自然体験プログラムを実施している。木曜日の来館者傾向は下表のようになった。

【表2】

時間帯	今年度の木曜日割合		今年度平日割合	
	夏季(8月)	冬季(12月)	夏季(8月)	冬季(12月)
9:00~10:00	7%	23%	10%	8%
10:00~11:00	22%	11%	20%	19%
11:00~12:00	30%	13%	26%	6%
12:00~13:00	18%	12%	10%	3%
13:00~14:00	12%	14%	15%	8%
14:00~15:00	8%	16%	11%	34%
15:00~16:00	3%	11%	4%	22%
16:00~17:00	0%	0%	4%	0%

\*小数点以下四捨五入

## 4 傷病等の様子

- (ア) 救護室で処置をした件数 14件  
 (一時休養、打撲、擦過傷、虫刺され等)
- (イ) 医療機関への搬送 なし
- (ウ) 後日受診件数 8件

## ボランティアの活動状況

のべ活動人数 (平成25年度) 318人

登録者 (リスクマネジメント研修受講後) 数 128人

※2月末現在

ボランティア活動の共通認識  
～できる人が、できるときに、できることを～

### 1 ボランティアの活動内容

- ①プレイリーダー的な活動
- ②インストラクター的な活動
- ③その他、環境整備などの活動

### 2 ボランティア等養成事業の実績

- ◆平成25年5月10日(金)ほか  
安全に関する研修 (リスクマネジメント研修)  
講師：こどもの城スタッフ
- ◆平成25年9月28日(土)  
周辺自然環境研修  
講師：宮崎正隆 (諫早自然保護協会理事)
- ◆平成25年10月13日(日)～14日(祝)  
カウンセリング研修  
講師：松木 正 (環境教育事務所マザーアースエデュケーション代表)  
立野美香 (環境教育事務所マザーアースエデュケーションスタッフ)
- ◆平成26年1月26日(日)  
企画研修  
講師：こどもの城スタッフ
- ◆平成26年2月1日(土)～2日(日)  
ファシリテーション研修  
講師：難波克己 (玉川大学心の教育実践センター主任代理)





## 申込み団体一覧 (平成25年3月～平成26年2月)

利用日	団体名
<b>◆保育園等</b>	
4月20日	みたち保育園
5月11日	長田くみあい保育所
5月16日	井崎保育園
5月18日	本野保育園
5月24日	ともしび保育園
6月8日	サンタの家保育園
6月22日	すこやか保育園
6月22日	深山保育園 (出前)
7月13日	金松園保育所
9月20日	サンタの家保育園
10月11日	サンタの家保育園
10月16日	金華保育園
10月19日	深海保育園
11月2日	有喜めくみの園保育園
1月24日	深山保育園
<b>◆幼稚園</b>	
3月1日	小栗幼稚園
3月8日	山美幼稚園
4月24日	鎮西学院幼稚園
9月20日	諫早幼稚園
<b>◆学童保育</b>	
3月27日	みのり学童クラブ
7月27日	飯盛学童保育「かたらんね」
8月27日	児童クラブルンビニー
8月28日	真津山学童クラブ
<b>◆子育てサークル・センター等</b>	
3月5日	森っ子クラブ
3月6日	美少女クラブ
3月7日	こびとの家
3月8日	ゆかいな仲間たち
3月9日	自家製クラブ
3月10日	もりの探検隊
3月13日	美少女クラブ
3月19日	森っ子クラブ
3月26日	森っ子クラブ
4月2日	森っ子クラブ
4月7日	自家製クラブ
4月9日	森っ子クラブ
4月14日	もりの探検隊
4月16日	森っ子クラブ
4月20日	自家製クラブ
4月23日	森っ子クラブ
4月27日	親子クッキングクラブ
5月5日	自家製クラブ
5月9日	有喜公民館子育てサロン
5月12日	もりの探検隊
5月14日	森っ子クラブ
5月21日	森っ子クラブ
5月25日	自家製クラブ
5月28日	森っ子クラブ
5月28日	子育てサロンみかんちゃんクラブ
6月4日	森っ子クラブ
6月9日	こどもクッキングクラブ
6月11日	森っ子クラブ
6月16日	森っ子クラブ
6月23日	もりの探検隊
6月25日	森っ子クラブ
7月2日	森っ子クラブ

# Report

利 用 日	団 体 名
7月5日	デイサービスわくわく
7月6日	こどもクッキングクラブ
7月10日	虹のわっか
7月14日	森っ子クラブ
7月18日	ゆかいな仲間たち
7月23日	森っ子クラブ
8月11日	サークルヒロミ
8月18日	森っ子クラブ
8月23日	にじのわっか
9月8日	こどもクッキングクラブ
9月15日	森っ子サンデー
10月11日	子育てサロン「かるがも」
10月18日	子育て支援センター「くるみの家」
10月20日	子育て楽しもう会
10月29日	森っ子クラブ
11月3日	こどもクッキングクラブ
11月6日	サークル高橋
11月15日	森っ子クラブ
11月26日	森っ子クラブ
11月26日	子育てグループあそびの広場
12月25日	こどもクッキングクラブ
2月15日	キラキラ・パーティー
2月16日	桜が丘保育園ゆり組同窓会
2月21日	森っ子クラブ
<b>◆PTA</b>	
3月3日	西諫早小学校 1年1組PTA
3月8日	真崎小学校 6年生PTA
3月12日	真崎小学校 育友会(出前)
3月28日	北諫早幼稚園 さりん組PTA
5月11日	小野小学校 2年2組PTA
5月11日	小野小学校 2年2組児童
6月1日	北諫早小学校 1年生PTA
6月8日	長里小学校 2年生PTA
6月8日	長里小学校 2年生児童
6月15日	御館山小学校 3年生PTA
6月15日	御館山小学校 3年生児童
6月16日	小野小学校 2年1組PTA
6月16日	北諫早小学校 2年生PTA
6月16日	北諫早小学校 2年生児童
6月22日	長里小学校 4年生PTA
6月29日	喜々津東小学校 4年生PTA
6月29日	喜々津東小学校 4年生児童
7月13日	北諫早小学校 3年2組PTA
7月13日	北諫早小学校 3年2組児童
7月14日	高来西小学校 4年生PTA
7月14日	高来西小学校 4年生児童
7月15日	森山東小学校 3年生PTA・児童
7月19日	本野小学校 5年生PTA事前研修
7月20日	飯盛東小学校 6年生PTA
7月20日	飯盛東小学校 6年生児童
7月28日	真津山小学校 3年2組PTA
8月2日	本野小学校 5年生PTA
8月2日	本野小学校 5年生児童
8月3日	本野小学校 3年生PTA
8月3日	本野小学校 3年生児童
8月7日	諫早小学校 5年1組PTA
8月7日	諫早小学校 5年1組児童
9月10日	御館山小学校 6年生授業(出前)
9月21日	湯江小学校 5年生PTA
9月21日	湯江小学校 5年生児童
9月28日	長田小学校 1年生PTA・児童
9月29日	御館山小学校 6年生PTA
9月29日	御館山小学校 6年生児童



利用日	団体名
10月5日	上諫早小学校1年生PTA
10月5日	上諫早小学校1年生児童
10月12日	長里小学校3年生PTA・児童
10月19日	真崎小学校2年生PTA
10月19日	真崎小学校2年生児童
10月27日	北諫早小学校1年1組PTA・児童
11月3日	みはる台小学校3年2組PTA・児童
11月10日	真津山小学校3年3組PTA
11月10日	真津山小学校3年3組児童
11月28日	御館山小学校6年生PTA（出前）
11月30日	諫早小学校1年3組PTA
11月30日	諫早小学校1年3組児童
12月8日	森山東小学校6・1年生合同PTA事前研修
12月19日	ばらの幼稚園ひまわり組
12月21日	森山東小学校6・1年生合同PTA
12月21日	森山東小学校6・1年生児童
1月6日	市PTA連合会
1月14日	市PTA連合会（出前）
1月28日	御館山小学校6年生PTA（出前）
2月1日	仲沖保育園つき組PTA
2月15日	真津山小学校5年生PTA
2月15日	真津山小学校5年生リーダー研修
2月22日	小栗小学校5年生PTA（出前）
2月28日	森山中学校2年生PTA（出前）
◆学校	
3月4日	真崎小学校6年生（出前）
4月2日	長崎ウエスレヤン大学事前学習
4月15日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
4月20日	長崎ウエスレヤン大学（出前）
4月22日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
5月7日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
5月9日	諫早特別支援学校高等部
5月13日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
5月15日	長崎東高等学校女子バレー部
5月16日	活水女子大学子ども学科事前研修（出前）
5月20日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
5月25日	活水女子大学子ども学科
5月27日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
5月28日	長崎東高等学校女子バレー部
5月30日	活水女子大学子ども学科事後研修（出前）
5月31日	諫早特別支援学校小学部1年生
6月3日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
6月5日	諫早特別支援学校小学部3年生
6月7日	森山東小学校4年生授業（出前）
6月10日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
6月10日	創成館高等学校事前研修（出前）
6月11日	創成館高等学校事前研修（出前）
6月17日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
6月20日	創成館高等学校（自然の家）
6月21日	創成館高等学校（自然の家）
6月22日	創成館高等学校（自然の家）
6月24日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
7月1日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
7月8日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
7月17日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
7月21日	希望が丘特別支援学校（出前）
7月22日	長崎ウエスレヤン大学コミュニケーション演習（出前）
8月4日	長崎日本大学高等学校デザイン美術科
8月28日	長田中学校バレー部
10月11日	諫早特別支援学校中等部1年生
10月17日	飯盛東小学校特別支援学級（出前）
11月22日	西諫早小学校2年生生活科授業
12月4日	長崎柔鍼スポーツ専門学校

# Report

利 用 日	団 体 名
12月5日	長里小学校人権集会（出前）
12月12日	活水女子大学現代日本文化学科（出前）
1月11日	活水女子大学現代日本文化学科
1月12日	活水女子大学現代日本文化学科（自然の家）
1月14日	創成館高等学校職員研修（出前）
1月15日	創成館高等学校1年生（出前）
1月16日	創成館高等学校ルネサンス
1月25日	活水女子大学子ども学科
<b>◆青少年団体等</b>	
3月2日	自然環境研修
3月16日～17日	ファンリテーション研修
3月20日	諫早国際交流センター
3月24日	小ヶ倉町子ども会
3月26日	諫早中央公民館
3月26日	少年少女ボランティアクラブ
3月26日	福島一時保養プロジェクト
3月27日	諫早中央公民館
3月28日	諫早中央公民館
5月10日	リスクマネジメント研修
5月25日	少年少女ボランティアクラブ
6月28日	青葉台子ども会企画研修
7月11日	真津山地区民生児童委員協議会
7月13日	長崎ウエスレヤン大学OB会（出前）
7月18日	青葉台子ども会保護者研修（出前）
7月21日	諫早小学校少年サッカークラブ親・指導者
7月21日	諫早小学校少年サッカークラブ
7月21日	栄田町すなお子ども会
7月24日	姉川病院保育室
7月24日	高来公民館
7月30日	飯盛公民館
7月31日	堂崎第一自治会
7月31日	堂崎第一自治会保護者・役員
8月2日	市企画政策課平和学習会
9月18日	ボランティアクラブ
9月22日～23日	高来町青少年健全育成会
9月28日	周辺自然環境研修
10月4日	真津山ドッジボールクラブ「ももたろう」保護者指導者
10月13日～14日	カウンセリング研修
10月26日	森の音楽会実行委員会
11月9日	多良見大島子ども会
11月23日	県央地区スポレク実行委員会
12月1日	白岩南部子ども会
12月7日	真津山ドッジボールクラブ「ももたろう」
1月11日	真津山ドッジボールクラブ「ももたろう」
1月26日	企画研修
2月1日	真津山ドッジボールクラブ「ももたろう」
2月8日	チーム・アドベンチャーワールド
2月8日～9日	ファンリテーション研修
2月22日	真津山ドッジボールクラブ「ももたろう」
<b>◆その他</b>	
3月13日	諫早南ロータリークラブ
3月13日	デイサービスなかやま
3月24日	地域演劇で町づくり実行委員会（出前）
4月4日	市新任職員前期研修
5月14日	日の出町いきいきサロン
5月24日	高来公民館高齢者講座（出前）
7月18日	市課長補佐研修（自然の家）
8月19日	私立幼稚園主任研修
8月28日	きぼうの里
9月3日	諫早市ボランティア連絡協議会（出前）
10月3日	市新任職員後期研修
10月9日	デイサービスセンター暖家
10月12日	デイサービスセンター暖家



利 用 日	団 体 名
10月12日	NPO法人KHG
11月1日	諫早療育センター
11月29日	諫早療育センター
1月15日	諫早記念病院スタッフ研修
1月22日	諫早記念病院スタッフ研修（出前）
2月7日	社会教育主事研修
2月19日	子育てタクシードライバー研修
2月25日	諫早市人権・部落問題学習会（出前）
<b>◆実習受入れ</b>	
7月27日～8月2日	教員5年経験研修（1名）
8月16日～30日	市2・3年目職員研修（計25名）
8月27日～9月6日	長崎県立大学インターンシップ（2名）
8月27日～9月6日	長崎ウエスレヤン大学インターンシップ（1名）
<b>◆行政等視察受入れ</b>	
3月7日	佐賀県小城市社会福祉協議会
3月31日	広島県廿日市市青少年健全育成市民会議
4月24日	島原市有明町子ども会育成連絡協議会
7月26日	広島県廿日市市民生委員・児童委員協議会
7月26日	青空知事室
8月13日	東京ガス
10月17日	三市（出雲市・津山市）交流都市
11月19日	ちくほう女性会議
11月30日	文部科学省青少年課
2月2日	久留米市母子寡婦会
2月12日～13日	広島文教女子大学
<b>◆講師派遣</b>	
4月3日	長崎市立橘小学校職員研修
4月9日	佐賀県多久市児童館
4月23日	島原市有明公民館
6月7日	長崎県立大村城南高等学校
6月9日	佐賀県多良小学校PTA
6月16日	福岡県糟屋地区少年団体指導者研修
6月18日	長崎市聖母の騎士東長崎幼稚園
6月30日～7月1日	えひめこどもの城（愛媛県児童厚生員研修）
7月6日	佐賀県黒髪少年自然の家ボランティア研修
7月6日	長崎ペンギン水族館ボランティア研修
7月9日	聖母の騎士東長崎幼稚園
8月7日	長崎県高等学校指導者養成講座
8月30日	広島県青少年健全育成県民会議
8月31日	広島県廿日市市青少年健全育成市民会議
9月13日	長崎県立大村城南高等学校
10月10日	長崎県立大村城南高等学校
10月28日	長崎市矢上幼稚園
10月30日	大村市立大村中学校区PTA
11月5日	福岡県教育力向上事業・田川郡添田町
11月10日	福岡県母子寡婦大会
11月11日	佐賀県小城市子育て支援「ふらんこ」
11月12日	佐賀県多久市児童館
11月12日	大村市人権教育研究大会
11月18日	長崎市子育てサークル「にじのわっか」
12月5日	対馬市立大船越中学校人権学習
1月24日	幕張放送大学学園職員研修
2月4日	沖縄県体験活動指導者養成セミナー
2月7日	大村市玖島中学校区PTA
2月14日	広島県廿日市市青少年健全育成市民会議
2月15日	広島県廿日市市PTA連合会
2月16日	広島県廿日市市青少年健全育成市民会議
2月20日	市村自然塾九州スタッフ研修

